

“How are you?”と「お元気ですか？」の比較文化論

— 挨拶を育む社会背景の考察 —

松原 健二

1. はじめに

“How are you?” — “I'm fine, thank you, and you?” — “Fine, thank you.” 私たち日本人は英語学習を始めごく初期の段階でこの英語による挨拶を学び、常套句として覚えてしまうことが多い。そして、これが人と人とがその日初めて出会った時の英語圏での一般的な挨拶であることを、何の疑いを持つことなく受け入れていく。この英語の挨拶の定着度は我が国において驚くほど高く、子供から老人に至るまで国民の誰もが知っているかの様相を呈していると言っても過言ではない。

しかしよく考えてみると、「お元気ですか?」、「はい、元気です。あなたはいかがですか?」、「ええ、元気です」などという挨拶が日本人どうしの中で交わされることは、日常的にはあまり多く見られることではない。このようなお互いの体調を確認し合うような挨拶は、長い間会わなかった人達が再会したような場合には用いられるものの、それ以外にはあまり用いられないのが普通である。

ここで、ひとつの疑問が生じる。英語話者の間では“How are you?”という相手の体調を尋ねる挨拶が日常的に用いられているのに対して、日本語話者の間では「お元気ですか?」をどうして日常的に用いる習慣がないのであろうか。これは“How are you?”に対応する言葉がないから言えない、という訳でないことは明らかである。歴とした「お元気ですか?」という表現があるにもかかわらず、この表現をそれほど頻繁に用いないのはあくまで生活習慣、換言すれば文化の問題に違いない。

小論では、英語話者間において“How are you?”が頻繁に用いられる理由を、文化的／歴史的に探っていく。それは同時に、日本語話者間において「お元気ですか?」が日常的にあまり用いられない理由の裏返しになっている筈である。しかしこの問題を考える前に、まず人間にとって挨拶とは何か、という最も基本的で根源的な問題、そして挨拶の持つ社会的機能というものについて考えてみることにしたい。

2. 挨拶における交話機能と叙述機能

古今東西、言語の種類を問わず、人と人との挨拶行動は人間社会に普遍的に見られる現象である。これは、人間が相手に対して敵対心を持たないことを示し、基本的に平和な関係を持つことを希求する心理から発生するものと考えられ、その意味できわめて自然な人

間行動のひとつと言えるであろう。現に日本語の「挨拶」という言葉の「挨」および「拶」という漢字は、そもそも両者とも「相手に近づく」という意味であり、挨拶行動の本質を言い表している。

さて、人間の挨拶行動は言語によるものだけに限られたものではなく、会釈や握手などの身体動作をはじめ、広い意味では物品を贈るという贈答行動などをも含むものと考えられる。そしてこれらの行動は単独で起こる場合だけでなく、ほぼ同時にこれらが組み合わされる形で行われることも多く見受けられる。しかし小論ではこれらの挨拶行動を包括的に考察することはせず、単に言葉による挨拶のみに絞って論考を進めていくことにする。

さて言葉による挨拶行動だけに限ってみても、それにはいくつかの類型化が可能である。たとえば鈴木(1996)は、「交話」・「叙述」・「詩的」という3機能の有無という観点から、言葉による挨拶行動を次のように3種類に分類している。

		あ い さ つ		
形式と長さ		I	II	III
機能		<	<	
交話的 (phatic)		+	+	+
叙述・描写的 (referential)		-	+	+
詩的・創造的 (poetic)		-	-	+
実 例		モシモシ hello	おはよう good-bye	祝 詞 speech

『教養としての言語学』 p.88]

この分類にしたがうと、“How are you?”という挨拶は、“Good-by”などと同じく型式IIに属することになる。この型式に属する挨拶の特徴は、「ある程度の意味(伝達)内容のある言葉が使われてはいるが、その文字通りの意味を伝えることが発話の目的ではなく、全体で一つのまとまった公式(formula)として用いられている点」(同上, p.85)であり、「機能という点では、交話(phatic)機能を中心としながらも、叙述(描写)の働きが多少は含まれている」(同上, p.86)のである。したがって“How are you?”という挨拶は、相手との人間関係を円滑に保つために発するという交話機能を中心としながらも、相手の体調を問うという文字通りの意味を内包しているということになる。ここが非常に微妙なところであり、“How are you?”と聞かれた時に体調の悪い場合はどのように答えるかという問題に関しては、地域差や個人差などが存在する。本当は頭が痛むという場合に、“I have a headache today.”と答えるのか、それとも決まり文句として“I'm fine, thank you.”と答えるのかは、その痛みの程度にもよるであろうが、それ以外にその地域での「交話機能-叙述機能」のバランス感覚や、発話者のとらえ方が大きく関係し

ている。これは、ちょうど日本語の挨拶で「どちらまで？」と聞かれた時に、正直に目的地を答えるか、それとも「ええ、ちょっとそこまで」と曖昧な答え方で済ませるのかというのと同じである。

では、そもそも型式Ⅱに属する“How are you?”などの挨拶は、どのような歴史的変遷を経て交話機能と叙述機能の両方を持つに至ったのであろうか。この問題を解くために、まず鈴木のカテゴリにしたがえば同じく型式Ⅱに属する“Good-bye.”という挨拶のことを考えてみたい。“Good-bye.”という言葉は、“May God be with ye.”あるいは“God be with ye.”が元々の形であり、これが短縮されると共に、“Good morning.”などの影響で‘God’が‘Good’に変化したものである。すなわち、“Good-bye.”とは「あなたに、神様の御加護がありますように」という相手の幸福を祈る言葉が元来の意味である。これが使用頻度の増加に伴い短縮化されると共に叙述機能が薄れ、それと反比例して交話機能が増大していったものなのである。そしてこれと同様に“How are you?”という挨拶も、元来は相手の体調を尋ねる疑問文であったものが、交話機能が伸張して叙述機能を衰退させていったものと考えられる。

このように考えると、“How are you?”という挨拶には、かつては現代以上に叙述的意味が強く存在していたことが容易に推測できる。それならば、相手の体調を問うことを目的としたこのような挨拶が叙述的に機能していた社会とはいかなる社会であったのか、という次なる疑問が湧いてくる。

3. “How are you?”を育む文化的基盤

本節では、“How are you?”という挨拶を育んだ英語圏の文化と社会について、換言すれば、相手の体調を尋ねることが日常的な会話において容易に受け入れられる社会というのものについて考えてみたい。この考察を進めていく際に基本的な前提となるのは、「尋ねなければ相手の体調がよくわからない」、あるいは「話者が相手の体調を尋ねてみたいと思う」という状況の存在である。そのような状況があってこそ、“How are you?”が生まれてくる筈であるからである。それでは、そのような状況とは如何なるものなのであろうか。

まず第一に考えられるのは、相手の体調の変化が激しいということである。体調の変化がほとんどない状況においては、体調について尋ねる言葉が日常的な挨拶として成立することはあり得ないであろう。また、“How are you?”という疑問に対して、“I'm fine, thank you, and you?”と答え、それに“Fine, thank you.”と続く一連の流れを考えると、この場合の体調の変化というのは、お互いのものであることがわかる。すなわち、お互いに体調が変わり易いという前提が存在しているものと考えられることができる。

第二に考えられるのは、目で見ただけでは相手の体調が正確に判断できない、という状況である。これにはいくつかの場合が考えられ、相手との距離が離れているとか、暗くて相手がよく見えないという場合も想定できる。あるいは、表面的には見えにくい身体部位に疾患やケガを負っている可能性が高い場合も、これに含まれるであろう。

第三に、「話者が相手の体調を尋ねてみたいと思う」という状況を考えると、相手

の体調の善し悪しに話者の生活が影響を受けるとか、相手の体調が話者の利害に何らかの形で結び付くというような可能性が考えられる。

そもそも挨拶とは、社会の形態、言語の種類、あるいは当事者たちの社会階級、年齢、性別などのファクターとはほぼ無関係に、同じ言語圏においては広く共通に交わされる言葉である。もちろん上記のファクターによって、言語面での様々なバリエーションは存在するが、“How are you?”などというきわめて一般的、日常的な挨拶は、英語話者の間であまねく用いられているものである。したがって、“How are you?”という「相手の体調を尋ねる」挨拶が生まれ、広く定着した英語圏の文化基盤には、それが必然となるような社会的背景が存在していたことはまず間違いのない事実であろう。具体的には、上記の三つの要件をある程度満たすような社会の存在があったということになる。それでは、そのような社会とは具体的にどのような社会なのか、ということについて次節で考察を進めていくことにする。

4. 人々の生業（なりわい）と挨拶

人々の交わす日常的な挨拶が、その人達の生業に深く関わることは広く認められる事実である。身近な例で考えてみると、日本語における天気に関する挨拶がある。周知の通り、この日本においては、挨拶として天気に関することを話題にすることが多い。「今日は、いいお天気ですね」とか、「朝から暑いですねえ」、あるいは「昨夜はすごい風だったですね」等々である。これら天気に関する挨拶が日本の中に生まれ広く定着しているのは、次のような要件が揃っているからだと考えられる。

まず、気象の変化が激しいことである。暑かったり寒かったり、雨が降ったり雪が降ったり、日本の天気は本当にめまぐるしく変化する。もしこれが、季節の変化がほとんどなく一年中ほぼ同じ天気が続くような土地であるならば、このような挨拶が生まれる筈はない。第二に、それらの気象変化が当事者たちの生活に密接に関わっているということが挙げられる。これは単に生活上の影響を受けるという程度を越えて、彼らの生業の成否に関わるものと考えた方が良さだろう。第三には、これらの挨拶が交わされる背景には、人々の生業に共通性のあること、換言するならば彼らがほぼ同じ職業に従事しているということが想定できる。挨拶を交わす双方が共通の生業を持つということは共通利害の存在ということを意味し、それが天気を話題とした挨拶の誕生や発展、定着に大きく影響を及ぼしてきたものと考えられる。言わば、生業の共通性がこの種の挨拶の成立前提となっていたものと考えられるのである。

この点に関しては、南博他(1983)にも次のような記述がある。

柳田国男もいうように、日本のように風や雨の日が多く、気象が毎日のように変化して、しかもその制限を受ける“生産事業”(典型的には農業)にたずさわる者が、多数集中的に住んでいるような国でないと、その日の天気についての評価的発言が誰にも素直な共感を持って受け入れられにくいということは確かだろう。

このように日本においては、気象の変化が激しいという自然条件に加えて、人々が気象の変化に大きな影響を受ける農業という生産事業を共通の生業としていることが多かったために、天気に関する挨拶が育まれ発達したものと考えられるのである。

それでは、前節で考察した“How are you?”という挨拶を育んだ英語圏の社会とは、一体どのような生業を主体とした社会であったのであろうか。この問題に対する答としてすぐに思い浮かぶのは「狩猟・採集」ということである。確かに狩猟などを生業とする人々にとっては、生活のための仕事に危険が伴うし、ケガをすることも多いだろう。鳥類や小動物の狩猟ならまだしも、シカ、クマ、イノシシなどの獣類を対象にする場合は、命懸けであることも多かった筈である。また単独狩猟の形態を取る場合には、自分とは違う場所へ狩りに出ていた他人のことは、獲物の収穫や身体的安全度といった観点からも是非とも知りたい情報に富んでいたであろう。相手に会ったとたんに“How are you?”と問いかける風土は、ゲルマン民族がかつて長年にわたって狩猟や採集のみを生業としていたために醸成されたという可能性がある。確かに狩猟や採集を生業とする人々の暮らしは、“How are you?”の文化的基盤であると前節で言及した三つの要件についても、ほぼ満たしている。

しかし、ゲルマン民族は古来より一貫して狩猟・採集のみを生業としてきた訳ではない。原始的な農耕は今から1万年ほど前に行われるようになったと言われており、紀元前3000年頃には、チグリス・ユーフラテス川やナイル川沿岸に定住した人々によって、本格的に農業や牧畜が開始されている。当時は主に麦類を栽培し、パンを食べる習慣もこの頃に始まったものと考えられている。もちろん農耕のみを生業とするほどには収穫量は期待できなかったであろうから、狩猟、採集、牧畜との兼業であったことは十分に考えられる。

紀元5世紀頃にブリテン島に移り住んだゲルマン民族の諸部族であるアングル人、フリースランド人、サクソン人なども、麦などの栽培技術は持っていたものと推測され、ブリテン島に定住すると共に農耕や牧畜にも携わったものと思われる。狩猟や採集だけで多くの人間の食糧を満たすことはできなかったからである。一般に狩猟や採集という食糧調達手段は、定住することによって自ずと限界が生じることになる。居住地周辺という一定の地域においては、捕ることのできる動物の数や採集できる木の実などの量にも限りがあるからだ。したがって狩猟・採集経済社会においては、定期的に移動するということがほぼ必然的に義務づけられてしまうのだが、移動を続けるということは生活上の苦痛が伴う。ここに「農耕」と「牧畜」という産業が発生する基盤が生じる。これらは「生産的である」という点で狩猟や採集とは大きく異なる。狩猟や採集では、とり尽くしてしまえばそれで終わりだが、農耕や牧畜は一箇所に定住していても、人間の労働の対価としての収穫が期待できる。すなわち、農耕や牧畜を修得したことで移動の必要がなくなり、定住が可能になったのである。

このように、ブリテン島に移り住んだ後のアングル人たちは、単に狩猟と採集だけに頼る生活から、徐々に農耕や牧畜を生業とする生活に移行していったものと考えられる。ただ、狩猟民族としての気質といったものは脈々として受け継がれていたのではないかと思われるし、彼らが農耕を始めて定住した生活をするようになった後も、狩猟や牧畜といった動物との関わりのある生活は続けられたであろうから、“How are you?”に類する挨拶

挨拶を交わしていたことは十分に考えられるのである。アングル人たちの用いていた言葉である古英語は現代英語の原型であり、狩猟・採集経済時代の気質が現代英語の中に生き続けているとしても、何ら不思議なことではない。

5. 新大陸開拓者たちの生活と生業

17世紀初頭、イギリスからピルグリム・ファーザーズたちがニューイングランドへ渡ったのを皮切りに、ヨーロッパから北米大陸への入植が始まる。当時、未開の大陸に入植するという行為は命懸けの冒険であり、祖国で宗教的迫害を受けたというマイナス要因と、新天地での開拓に神の加護があると信じられたというプラス要因の両者の存在があればこそできたものと思われる。現在、日本で近代的な生活を送る我々からは想像がしにくいのだが、未開の大陸に入植するというのはとてつもない試練の連続である。衣・食・住という人間生活の最も基本となるもののいずれもが、新地においては容易に調達できないからである。

紀元5世紀頃にブリテン島に渡ったアングル人たちが、そこで農耕と牧畜を生業として取り入れていった経緯は前節で述べたが、近世以降に新大陸と呼ばれる地域に渡った入植者たちは、農耕の技術は持ち合わせていても、すぐに農耕で生計を立てるといった訳にはいかなかったのである。これは、農耕というものがそれにふさわしい耕地と、収穫までに長い時間を要するということが大きく関係している。農耕を始めるには、まず原野を開墾することが必要であり、それが終わった後で初めて種蒔きができる。しかし、その後半年とか1年とかの時間を置かなければ、収穫は期待できない。その間に絶え間無い手入れが必要だし、気象災害などによって作物が被害を受ける可能性があるのは言うまでもない。次の引用は、1788年にオーストラリア大陸に入植した人々の、当時の苦労について書かれたものである。

最初のシーズンに蒔いた穀物の種は、土質が悪かったり、種の多くが船倉に長期間置かれたために過熱したり、虫にやられたり、大部分が芽を出さなかった。(中略)入植地には新鮮な果物を実らせる木がなく、野菜はかごにやっと二、三杯程度とれるだけだったため、多くの男女が壊血病で倒れた。

『距離の暴虐』 p.39

これはオーストラリアの例であるが、北米大陸や他の新大陸に移り住んだ人々の暮らしにも、多くの点で共通するものがあったものと思われる。

さて当時の入植者が、農耕に苦労する傍ら食糧調達のために取り得た手段は、自然の恵みを見つけることであった。すなわち、狩猟と採集である。農耕を軌道に乗せるまでには数年という長い時間が必要であり、それまでの間に彼らが行ったのは、本国（イギリス等）からの補給食糧を待つ以外には、狩猟と採集しかなかったのだ。農耕の技術を持ちつつも、彼らの生活は古の昔のスタイルに溯らざるを得なくなったのである。ここに狩猟・採集が復活する。そして“How are you?”という挨拶が交わされる文化的基盤も、同時に復活

することになるのである。

6. 人々の暮らしと挨拶

*Oxford English Dictionary*によると、相手の体調を尋ねる“How are you?”あるいは“How do you do?”などの原型である“*How-d'ye-do?*”などの挨拶が文献上で確認されるのは、17世紀以降である。これは、奇しくもヨーロッパ人たちの新大陸への移住時期と一致している。恐らくは、偶然の一致ではあるまい。

言葉というものは、一般にそれを用いる人々の暮らしと文化を反映している。特に挨拶などという日常的に交わされ広く定着している表現においては、なおさらである。小論では“*How are you?*”という英語の挨拶表現を中心に論考を進めてきたが、このような相手の体調を尋ねる挨拶が育まれ定着している背景には、英語圏における人々の暮らしの危険性というものが垣間見えるのである。狩猟や採集ほどではないにしても、彼らの行った牧畜という生業も、動物を相手にするだけにその危険度は農耕とは比べものにならない。欧米に比べ牧畜の規模も極めて小規模で、多くが稲作を主体とした農業を生業としてきた日本人には、日々の生活の中で動物との格闘や戦いはほとんどないに等しく、日々の暮らしは非常に安全度が高かったと言える。また比較的限られた狭い地域に固まって生活をする形態を取ることが多かった日本人には、お互いの体調は聞かずとも容易に推測が可能であったであろう。そういった意味で、人々の間に日常的に体調を尋ねる挨拶表現が育まれなかったのも、社会的必然性があったと言える。

冒頭でも触れたが、私たち日本人は英語学習のごく初期の段階で“*How are you?*”——“*I'm fine, thank you, and you?*”——“*Fine, thank you.*”という英語による挨拶表現をひとつの決まり文句として何の疑いもなく覚えてしまうことが多い。しかし、このような挨拶表現の背景には、動物と格闘しながら自分たちの生活を切り拓いていった人々の血と涙と汗の跡が感じ取れるのである。

文献

- 鈴木孝夫著(1996)『教養としての言語学』岩波新書
 南博・社会心理研究所編(1983)『日本人の生活文化事典』勁草書房
 Geoffrey Blainey著／長坂寿久・小林宏訳(1980)『距離の暴虐』サイマル出版会
 Manning Clark著／竹下美保子訳(1978)『オーストラリアの歴史』サイマル出版会
 佐藤洋一郎著(2000)『縄文農耕の世界』PHP新書
 渡部昇一著(2001)『講談 英語の歴史』PHP新書
 ヴァン・ポスト著／秋山さと子訳(1987)『狩猟民の心』新思索社
 嶋田義仁著(1998)『稲作文化の世界観』平凡社
 白井春男著(1996)『狩りと採集の時代・農業と牧畜の時代』人間の歴史の授業を創る会
The Oxford English Dictionary(1933) Oxford University Press